

ICT 機器を使った対話のプロセスの中で 変容していく「イメージ」を確立した音楽表現へ導く授業の取り組み —アクティブ・ラーニング実践授業—

愛知教育大学 教育学部教授 武本京子

1. はじめに

教育大学のピアノ演奏法の授業において、演奏法を指導するという一方向的な授業ではなく、受講生と教師全員で音楽作品の内容や分析を対話し、討論する、ICT機器を使った「イメージ奏法」の授業におけるアクティブ・ラーニングの授業実践報告を行なう。

2. 「イメージ奏法」を使ったICT活用の方法

「イメージ奏法」^{註)}とは、武本京子が考案し、展開させた楽曲を分析し、その音楽の「イメージ」を「言葉、色、絵、文字、表現曲線」などで視覚化して具体化し、「奏法」に結び付ける「独創的なピアノ演奏法&教育法のメソッド」である。

手順は、次のように行う。①作品の楽曲分析をする。②物語を作成、全体の構成を考える。③具体的奏法を誘導する「表現曲線」を記入する。④曲のイメージに相応しい色を楽譜に着色する。⑤「演奏設計図」である「イメージ楽譜」を作成して練習を重ね、演奏を完成させ、イメージ楽譜と演奏を発表する。

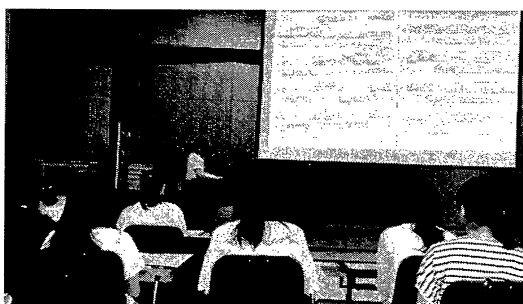


図1. イメージ楽譜と演奏を発表



図2. イメージ楽譜についての討論会

今回の発表では、学生がスマートフォンなどで学生独自の音楽表現や分析方法を映像化した「イメージ楽譜」を作成し、自己表現の考え方をスクリーン上で共有して授業(図1)を行い、受講生全員で対話し、学びあい、協働的なアクティブ・ラーニングとして実践して、楽曲の理解と演奏の変容の様子(図2)を報告する。

3. 「イメージ奏法」ICT活用のアクティブ・ラーニングの授業の効果

ICT活用の「イメージ奏法」を使った発表を前提とすることで、学生は作曲家や作品が求める内容に踏み込むようになる。作曲家や楽曲を研究する中で、さらに、文献等を調べることで作曲者や作品への関心を一層高めることができる。

- ① 「イメージ楽譜」を作成する過程において、テーマや構造の解明や、各フレーズの意味づけ、全体の構成を考えての物語作成を通して、楽曲分析や曲の構造を適切な考察ができるようになった。
- ② 「イメージ楽譜」をスクリーンに投影することで学生間に共有することにより、音楽の素晴らしさに気づき、学生同士や教師との対話の中から、自分の音楽に対する確固たる表現を見直し、より創意工夫を生かした精緻化された楽譜を作成するようになり、自信や確信を持った演奏技術の向上がみられた。
- ③ 音楽を取り巻く社会や思想、感情、自然などについても考え、人と共有することにより、汎用的能力の育成を図ることにつながった。
- ④ 自分の感性だけでイメージしていた音楽が、作曲家のことを熟知し、作品の深い分析を行うたびに、自分のイメージが変容し、確定していくことを視覚的にとらえ、学生同士で共有することにより、より深い作品の理解と理解の幅が広がる変容を遂げた。
- ⑤ 4年生や大学院生では、さらに、音楽表現に応じたイメージをバックに演奏する(図3)。

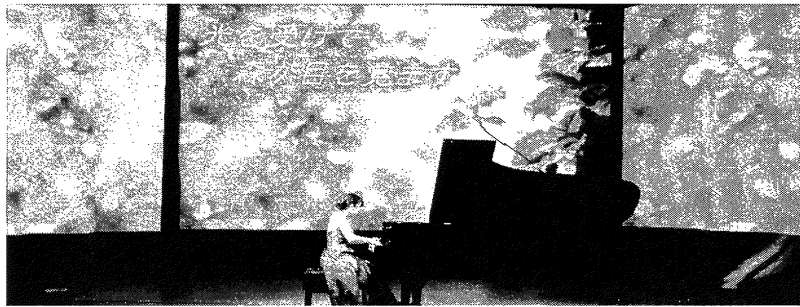


図3. イメージを具体化させた映像をバックに演奏発表の様子

4. 考察

①受講生全員でICTを使って音楽を視覚化し、アクティブ・ラーニングで対話を行うことを通して、イメージ楽譜を共有することにより音楽の構造や背景などや曲想との関わり及び音楽の多様性の理解を深め、創意工夫を生かした発表能力と演奏技術の向上がみられた。

②教師の卵として、自分が常にプレゼンをすることにより、学習する習慣や発表するための自宅学習の量が大幅に増え、教師になる自覚が芽生え、音楽の素晴らしさを実感することができた。

③音楽の中に隠されているメッセージを読み取ることにより、人間の汎用的能力の育成にも大変役立ち、教師としての人格形成を考える討論を行うことができた。

【注】* 中田(武本)京子(1995)『楽曲イメージ奏法』ドレミ楽譜

* 武本京子(2013)『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」解説書』音楽之友社

* 武本京子(2013)『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」によるワークブック

『ブルグミュラー 25の練習曲』音楽之友社